

# 環境・消費について考える —マドリードの一市民として

折井 善果  
慶應義塾大学准教授



環境デモに参加してみよ  
ムルシア州の湿地マール・メノールの保護団体によるデモ行進 (2019年)

近年、世界各地で異常気象が相次ぎ、地球温暖化が差し迫った問題となっている。我々は地球規模で消費生活を見直す必要に迫られているが、その取り組みの現状は国・地域によって異なるようだ。本稿では昨年 COP25 が開催されたスペインの現状を見てみよう。

わたしは勤務先から二年間の長期出張の機会を得、スペインのマドリード自治大学に所属しながら、近世初期の日本キリスト教宣教師に関する共同研究をおこなっている。出張期間の終わりが近づいてきた二〇一九年二月一日から五日まで、同地においてCOP25(第二五回国連気候変動枠組条約締約国会議)が開催された。産業革命の時代から今世紀末までの気温上昇を二度未満(できれば一五度)に抑えるための政治的合意は、会期延長にもかかわらず先送りされ、「行動のとき」というスローガンは見事に皮肉になってしまった。しかし開催地の市民にとってこの出来事は大きなインパクトを与えたように思う。各国代表者の政治的合意を求める「国際的」市民デモにわたしが参加するに至ったのは、会議場が自宅から徒歩一〇分の距離にあったこと、純粋な好奇心のみによるもので、以下は一市民の追想にすぎないことをお断りしておきたい。

## 訴える人びと

「地球Aはあっても地球Bはない」、「気候(変動)は今、宿題はあと」、「クールなキッズが地球を救う」など、若者の存在を押し出すスローガンが印象的だ。夕方六時よりほぼ三時間、スペインの首都の大動脈カステイヤーナ通りの、アトーチャからヌエボス・ミニステリオスまでのおよそ五キロメートルを、参加者と語を交えながら北上、行進した。カタルーニャ独立を問う住民投票を決定した同州政府幹部らが、憲法秩序の転覆扇動のことで有罪判決を受けて間もない時期であり、独立派が振る共和国時代の三色旗がかなり目立つ。ほかにも、チベット独立を求める同地域の旗や、最近カステイヤーリャ・イ・レオン州からの分離独立の動きが政治的に具体化したレオンの「県」旗(かつてのレオン王国の紋章が入っている)も入り乱れている。デモ当日の参加者の総計は警察発表では二万五〇〇〇人であったが、その数以上に事態を物々しくしているのは、やはり一六歳の環境活動家グレタ・トゥーンベリ氏を待ち構えるカメラやヘリコプターの旋回音であった(結局、彼女は保安上の理由で行進

自体にはほとんど参加しなかった。アタカマ砂漠の異常な拡大で自給自足の暮らしが維持できなくなったという、チリの先住民のグループ、ラムサール条約に指定されているムルシア州の湿地マール・メノールの惨状を訴える住民、収穫量が前年の二五パーセント減になったというアンダルシア州カディスのオリーブ農園経営者等々、ことばを交わした少なからずの参加者は、思想・信条を表明しに来ているのではない。すでに自らの今日明日の生活に困窮してこの場集まっている。

## 日常生活での変化

COP25の開催により、主要紙における環境問題関連の記事掲載数はいずれも過去最多を記録したという。しかし官公庁や公的機関などでペトボトル入りのミネラルウォーターは普通に使用されているし、粗大ごみの撤去も無料である。わたしの経験ではビニール袋一枚探すのに苦労したドイツをはじめ、ヨーロッパの環境対策先進国の後追いをしている感はない。一方子どもを通う保育園では、ランチに通常のメニューのほかに「肉なし」という選択肢があった。スペインでは子どもの教育を選ぶにあたって「宗教なし」というチェックボックスがあるが、それと同様の扱いである。また今回の会議にちなんで、保育園ではグレタ氏について学んだそ



マドリードではバス停と使用済み電池収集所がセットに (2019年)

★  
スペイン  
マドリード

うだ(ちなみにこの学びは週一回、ヨーロッパの偉人について学ぶ枠である)。結果、我が家の保育園児は「セーオードセ(OO)」をモンスタードと怖がるようになり、スーパーで肉を買う母親をしきりに非難するようになった。グレタ氏の論調については賛否両論あるが、彼女のそのまた下の世代の子どもに、ポップ・スター並みの影響力をもたらしたことは確かなようである。



デモの出発地点でごったがえす人波。奥にわずかに見えるのが赤・黄・紫のスペイン共和国旗 (2019年)

恥ずかしながら、わたしは牛肉と環境汚染のつながりなど、想像にさえおよんでいなかった(その意味で、わたしの環境に関する知識は日本の環境大臣にわずか先んじていただけ)。しかし結局、出張中のほぼ二年間で、我が家では綿棒や歯ブラシは竹製、シャンプーや洗剤はすべて固形石鹸に変わり、ザラの服(スペイン発のファストファッション・ブランド)を買いあさる悪癖はいつのまにか消えた。食卓も様変わりし、肉のメニューは却下され、スペインのパラエティー豊かな豆の味を楽しむようになった。国連事務総長のアントニオ・グテレス氏は、会期中の演説で、「わたしたちが緊急に自らの生活(Life)様式を変えなければ、生命(Life)そのものを危険にさらすことになる」と述べていた。手遅れかもしれない。でも沁みついた生活様式を洗いざらい吟味し、あらためて消費社会とは何かを考え始めるに十二分な機会であったことは間違いない。